西洋人宣教師の造った新漢語と造語の限界

——一九世紀中頃までの漢訳洋書を中心に

孫　建　軍

1　はじめに

一九世紀中頃までに中国で活動した西洋人宣教師の手によって様々な漢訳洋書が刊行されている。これらの書物が新漢語の成立、特に近代日中語彙交流において、多大な役割を果たしたことは各分野の研究で指摘されている。漢訳洋書に現れた新漢語は、維新後の日本で誕生した漢語に較べると、量的に少ないことは周知のとおりである。なかでも、社会科学関係の用語はごくわずかといってよい。

本論では漢訳洋書にある社会科学関係の内容、現れた新漢語を踏まえたうえで、在華西洋人宣教師の造語における限界を分析していく。

2　漢訳洋書の内容

一　漢訳洋書の時期区分と内容

飛田良文は、中国で活躍したヨーロッパやアメリカの宣教師が中国で執筆し、また口述した書籍類を漢訳洋書と呼び、「西洋文化そのもの」であった[1]と指摘している。ここで、一六世紀末（明末）から一八世紀（清の雍正帝による布教禁止）にかけて、マテオ・リッチを代表とするカトリック宣教師と中国人協力者による著訳書を前期漢訳洋書といい、一九世紀のはじめから日清戦争にかけて、ロバート・モリソンをはじめとするプロテスタント宣教師たちによる著訳書を後期漢訳洋書という[2]。

前期漢訳洋書には宗教関係の書物は当然最も多かったが、主として天文、暦学、地理、数学、医学等に関するヨーロッパの自然科学

表1　宣教師による地域別出版活動一覧

出版地	出版冊数	宗教関係	(%)	その他	(%)
香　港	60	37	62%	23	38%
広　州	42	29	69%	13	31%
福　州	42	26	62%	16	38%
廈　門	13	13	100%	0	0%
寧　波	106	86	81%	20	19%
上　海	171	138	81%	33	19%
計	434	329	76%	105	24%

知識が紹介されている。これらの西洋学問は「西学」と称され、一部の中国人官僚の注意を引いていた。自然科学知識に対して、社会科学関係の書物は極めて少なかった。前期漢訳洋書は禁教のため、一世紀以上を経てから、アヘン戦争後に再び人々に注目されるようになった。

前期漢訳洋書は著訳書に限っていたのに対し、後期漢訳洋書には著訳書だけでなく、定期刊行物や辞書も含まれている。以下では、『万国公法』(一八六四)までの後期漢訳洋書を見てみよう。

一八〇七年に、英人プロテスタント宣教師ロバート・モリソン(Robert Morrison, 中国名馬礼遜)の中国上陸を始め、アメリカ、オランダなどからも続々と宣教師を中国に派遣するようになった。彼らの宣教活動は出版物の発行にも及んだ。熊月之(一九九四)『西学東漸与晩清社会』によると、一八〇七年から一八四二年アヘン戦争終結まで、三〇年余の間に、一三八種類の中国語刊行物が出され、中では宗教関係のものが一〇六種類、七六%を占めており、その他(地理、歴史、政治、経済など)のものが三二種類、二四%を占めている。[3] 宗教関係の書物が圧倒的に多いのは当然であるが、この時期、西洋の政治、経済などを紹介する内容が既に見られた。中でも、中国本土で発行された最初の雑誌とされる『東西洋考毎月統記伝』(一八三三―三八年)、近代国家アメリカを専門に紹介する最初の書物『美理哥合省国志略』(一八三八)などが最も注目される。

アヘン戦争後、南京条約が調印され、香港割譲のほか、沿岸都市広州、福州、廈門(アモイ)、寧波、上海が開港した。西洋人宣教師の活動範囲が拡大され、活動の中心も上海に移転するようになった。一八四三年から一八六〇年までの出版物は表1のように簡単にまとめられる。[4]

後期漢訳洋書の出版は依然として宗教関係に集中していたことがわかる。その他の書物の割合はほぼ変わらないが、西洋文化の紹介が幅広くなり、中国における洋学伝来の歴史において、医学、数学、物理学、植物学、光学、年鑑、方言辞書、定期刊行物などの面で、多くの「最初」を記録している。[5] 例えば、ロンドン伝道会医師ホブソン(Benjamin Hobson, 中国名合信)の『博物新編』の内容は天文、地理、物理、化学、光学、電気学、生物などの分野にわたり、当時の科学読本として広く読まれた。彼の医学書『全体新論』、『西医略論』、『内科新説』、『婦嬰新説』を含めて、近代中国の自然科学の啓蒙に大きく貢献している。イギリス人宣教師ウィリアムソン

（Alexander Williamson, 中国名韋廉臣）、エドキンス（Joseph Edkins, 中国名艾約瑟）と中国人学者李善蘭共訳の『植物学』は初めて「植物学」という造語を使用し、日本語にも影響している。レッグ（James Legge, 中国名理雅各）の『智環啓蒙塾課初歩』（一八五六）は教科書として香港で出版され、漢英対照の形式をとり、二〇〇課を設けて自然科学から社会科学までの内容を分かりやすく説明している。定期刊行物では、『六合叢談』（一八五七―五八）は、近代上海の最初の総合雑誌であり、西洋の最新情報だけでなく、科学、文学、宗教、輸出入品リストの内容まで見られる。

一八六〇年から一八七〇年までの間、漢訳洋書の出版活動の勢いは衰えを見せた。しかし、出版物は少なかったが、『美理哥合省国志略』の改訂版『聯邦志略』（一八六二）、定期刊行物『中外襍誌』（一八六二）が注目される。北京で刊行された『万国公法』（一八六四）は最も注目に値する。

二　西洋社会科学知識に関する内容

後期漢訳洋書の内容は主に宗教関係に集中し、その他の書物も自然科学関係の内容がほとんどであるが、僅かであるが、西洋の政治、法律、貿易制度などを紹介するものも見られる。

単行本では、前節で上げた『智環啓蒙塾課初歩』のほかに、地理関係の専門書『地理全志』（一八五三―五四）では、各巻に「文論」、「質論」、「政論」という項目を設け、「政論」では各国の宗教、政治制度などを概括的にまとめている。

『大英国志』（一八五六）において、著者ミュアヘッド（William Muirhead, 中国名慕維廉）は英国という一つの国だけに焦点をしぼり、その歴史の展開を紹介している。巻八「志略」では、「職法志略」「行法志略」「教会志略」「財賦志略」「学校志略」「兵志略」「農商志略」「地理志略」という項目を設け、当時のイギリスの政治、社会、教育などを詳しく且つ明瞭に紹介している。『大英国志』は当時の中国人のイギリス理解に大いに役立った。

ブリッジマン（Elijah C. Bridgman, 中国名裨治文）著の『聯邦志略』は中国で三回ほど改版され、書名も改版毎に改められた。初版『美理哥合省国志略』は簡単なアメリカ地誌として、一八三八年に刊行され、魏源の『海国図志』にも収録されている。一八四六年本人によって改訂され、『亜美理駕合衆国志略』に名を改め、広州で刊行された。一八六四年上海に活動の中心を移したブリッジマンはさらに大きく改訂を行って、『大美聯邦志略』という書名で刊行した。これが和刻の底本となった。アメリカ合衆国の成立史など、全般的な紹介を展開している。特に注目されるのは「民脱英軛」と「建国立政」だといえよう。前者には独立宣言、後者には合衆国憲法が紹介されている。

定期刊行物は西洋諸国の政治動向、外交関係、科学知識、国際貿

易などの最新情報を紹介している。香港発行の月刊誌『遐邇貫珍』（一八五三―五六）の「花旗国政治制度」（一八五四年二月）という文章には、アメリカの大統領選挙制度、立法、司法、行政などの内容だけでなく、イギリスの政治制度との比較も試みられている。香港だけでなく、上海発行の『六合叢談』、寧波発行の『中外新報』（一八五四―六一）など、いずれも数多くの読者を集めていた。

『六合叢談』は停刊まで、毎月数回、上海で発行され、全部で一五号刊行されている。イギリス人宣教師ワイリー（Alexander Wylie, 中国名偉烈亜力）が編集した。執筆者は他に中国人王韜、ミュアヘッド、エドキンス、ウィリアムソンなどの名前があげられる。何れも中国近代文化交流史に名が残る人物である。主な内容は欧文の雑誌から世界各地の歴史・地理・通商事情などの記事を転載している。

ここであげた出版物は主として自然科学の内容が多く、中に社会科学関係の内容が含まれる点が特徴とされるが、これらと正反対に、『万国公法』は欧米で通用する国際法に関するものであり、社会科学知識の専門書である。『万国公法』は全部で四巻、一二章二三一節からなっており、第一巻から第四巻までそれぞれ「総論」、「論諸国自然之権」、「論諸国平時往来之権」、「論交戦条規」のタイトルとなっている。訳者アメリカ人宣教師マーティン（William A. P. Martin, 中国名丁韙良）は、一八五〇年に中国（初期は寧波）にやって来てから、如何に効率的に宣教活動を展開するかを考えつづけた。一八五四年寧波で刊行した宗教読物『天道遡原』は版を重ね、日本語や韓国語にも訳されている。[6] より多くの中国人官僚に基督教への好感を持たせれば、宣教活動にも効果的だと信じたマーティンは、アメリカ人Henry Wheatonの著*Elements of International Law*（初版本は一八三六年に刊行）の翻訳を始めた。この書物を中国語に訳し、政府高官との接触の機会を狙ったと考えられる。[7] タイトルは『万国公法』と訳した。翻訳の際の中国人協力者として江寧の何師孟、通州の李大文、大興の張煒及び定海の曹景栄の四人の名前があげられている。[8] 様々な努力の結果、『万国公法』は清政府によって、一八六四年（清・同治三）に刊行された。刊行される前に、清の総理衙門の秘書である歴城の陳欽、鄭州の李常華、定遠の方濬師、大竹の毛鴻図といった四人によって、半年がかりで校訂作業が行われたとされている。[9]

このように、一つの作品に、少なくとも九人が関わりをもつものは漢訳洋書の歴史上、極めて異例なケースと言えよう。清政府の『万国公法』に対する期待が窺える。一九世紀七〇、八〇年代には、『万国公法』は開港埠頭の地方官吏及び外交官の必備の書物であり、影響が非常に大きかったといわれている。[10]

『万国公法』は西洋社会知識を紹介した漢訳洋書の中で、唯一完全に地誌から離脱している。その翻訳・刊行は、一書物の出版といったレベルを超え、西洋・東洋の双方に対する思想的・政治的転換の

起爆剤として捉えられるに至ったと指摘されている。[11] 当然、新しい概念や理念を表わすことばも数多く誕生し、近代漢語の仲間入りを宣言したものと考えられる。

表 2　社会学関係の主な漢訳洋書一覧

刊行年	作者、編者	書　　名	社会科学関係の内容
1833-1835 1837-1838	郭実蝋	東西洋考毎月統記伝	1838 年 3 月「自主之理」、 1838 年 4，5，6 月「英吉利国政公会」、 1838 年 7 月「北亜墨利加辦国政之会」
1838	裨治文	美理哥合省国志略	巻十三国政 1　国領　内外大憲衙門、 巻十四国政 2　制例之設定、 巻十五国政 3　布政之大小官憲
1853-1854	慕維廉	地理全志	巻二　「大英国志」、 巻四　「米利堅合衆部志」
1853-1856	理雅各	遐邇貫珍	1853 年 10 月　英国政治制度、 1854 年 2 月　花旗国政治制度
1854-1858 1858-1861	瑪高温 応思理	中外新報	全篇
1856	慕維廉	大英国志	巻八職政志略
1856	理雅各	智環啓蒙塾課初歩	全篇
1857-1858	偉烈亜力	六合叢談	全篇
1861	裨治文	聯邦志略	巻九建国立政、巻十設官分職、巻十一理刑分職
1862	麦嘉湖	中外襍誌	全篇
1864	丁韙良	万国公法	全篇

以上のように、後期漢訳洋書（一八六四年まで）の中で、社会科学関係の知識が紹介された主なものが表2のようにまとめられる。

なお、上述した書物以外にも、西洋諸国の社会科学知識の内容が見られるものもあるが、量的には極端に少ないのがほとんどであった。一方、中国人による洋学書も注目されていた。日本にも影響の大きかったものに『瀛環志略』（一八四八）と『海国図志』（一八五二、百巻本）があげられるが、前者は西洋人に直接教わって書かれた書物であり、後者は漢訳洋書の引用がほとんどであるため、新漢語の造出という面より、むしろ新漢語の伝播に貢献が大きいといわれている。[12]

三　英華辞典の刊行

プロテスタント宣教師は著述活動と同時に、英華辞典の刊行にも積極的であった。辞典の出版を通じて、宣教活動がより効果的に展開されたことと考えられる。一八一五年から一八七二年にかけて、影響の大きいものとして、表3のような辞典があげられる。

この五種類の辞典は二つの宣教グループから出されている。モリソン、メドハーストとロプシャイトはロンドン伝道会（LMS：London Missionary Society）に所属しているのに対し、ウィリアムスとドゥーリットルはアメリカ公理会（ABCFM：American Board of Commissioners for Foreign Missions）に所属している。出版時期を

表3　宣教グループによる主な英華辞典一覧

刊行年	編集者	中国名	出版地	中国語書名	英語名
1815-1823	R. Morrison（モリソン）	馬礼遜	マカオ	字典（第一部） 五車韻府（第二部） ない（第三部）	A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE
1844	S. W. Williams（ウィリアムス）	衛三畏	マカオ	英華韻府歴階	AN ENGLISH AND CHINESE VOCABULARY, IN THE COURT DIALECT
1847-1848	W. H. Medhurst（メドハースト）	麦都思	上　海	ない	ENGLISH AND CHINESE DICTIONARY
1866-1869	W. Lobscheid（ロプシャイト）	羅存徳	香　港	英華字典	AN ENGLISH AND CHINESE DICTIONARY WITH THE PUNTI AND MANDARIN PRONONCIATION
1872	J. Doolittle（ドゥーリットル）	盧公明	福　州	英華萃林韻府	A VOCABULARY AND HAND-BOOK OF THE CHINESE LANGUAGE, ROMANIZED IN THE MANDARIN DIALECT

見ると、ロンドン伝道会も、アメリカ公理会も、いずれも約二五年の間隔で辞典を編集しており、両グループ共に辞典の編纂を通じて、言語の変化をまとめようとする意図が確認できる。

これらの辞典は近代中国にとっても、幕末明治日本にとっても大きな役割を果たしていた。

3　宣教師の造った近代中国語

飛田良文は近代日本語の成立パターンを「新造語」「転用語」「借用語」と分類している。[13] この分類に倣って、近代中国語は造語法から「新造語」（中国語にその概念がなく、新しく造語したことば）、「転用語」（中国に存在する類義語に新しい意味を付加して転用したことば）、「借用語」（明治以降に成立した日本語から借用したことば）の三種類に分けることができる。

一九世紀に、積極的な出版活動を通じて、多くの西洋文化を中国人に紹介していく中で、西洋人宣教師は西洋独特の概念をめぐって、様々な造語活動を試みた。一八七〇年代以前の漢訳洋書には、日本語による影響がないと見られる。つまり「借用語」がないと見てよい。したがって、宣教師の造語は「新造語」と「転用語」の二種類に分けることができる。

一　新造語

宣教師の仕事の中心は当然宣教活動にあるが、宣教活動が如何に効果的に行われるかは大きな課題であった。宣教師は進んだ西洋の地理、医学などの知識をもって、中国社会への浸透を図った。出版物は自然科学の内容が多く含まれるが、中には西洋、特にイギリスとアメリカの政治制度や法律に関する内容も少なくない。

漢訳洋書に見られる新造語は次のようないくつかの方法で造出されたものが多いように思われる。

まずは音訳である。慕維廉は『大英国志』（一八五六年）では、イギリスの議会を「巴力門」という音訳で表現している。上・下院をそれぞれ「労爾徳士」、「高門士」と表現している。この音訳表現は後に『大英国志』の和刻を通じて、日本語にも移入されている。大統領の音訳語にも「伯理璽天徳」「勃列西領」「伯理師天徳」「伯勒西敦」などが見られる。音訳表現は西洋政治の制度名や官職の名称に集中している。そういった音訳は次第に意訳されるようになる。『大英国志』には音訳表現と同時に、「巴力門」の意訳「議会」も見られる。西洋国家の議会は「議論の会」であるという特徴を表した造語といえよう。

直訳表現も多く見られる。Upper House は「上院」、Lower House は「下院」と称されるようになる。西洋国家が発行している「国債」は National debt の直訳であり、新しい造語といえよう。

造語の中で、特徴として認められるのは短縮という手法である。郭実蝋の『東西洋考毎月統記伝』ではイギリスとアメリカの政治制度について、コラムを設けて紹介している。一八三八年四、五、六月号の「英吉利国政公会」では「国政公会」「国公会」、七月号の「北亜墨利加辦国政之会」では「国政之会」「国政会」などと同時に、その略、つまり短縮表現として「国会」も使用している。

二　転用語

全体から見れば、新語の中で新造語は量的に少ない。新造語と比較すれば、転用語が多いといえる。中国では古典法律用語が発達しており、在来語で欧米法律を解釈するのは手っ取り早い方法であった。

欧米国家の政治には「選挙」は欠かせない。Election の表現には「揀択」「選択」「推択公挙」「推挙」「公選公挙」などがあったが、「選挙」という在来語も早くから使用され、転用語として成立していた。

President の訳についても、いずれも在来語で表現していた。「統領」、「総統」の他に、「魁首領」「首領主」「元首」「首領」「総統領」「長領」「衆統領」「首者」「国君」などの表現が見られる。「主」で訳した例もある。

「領事」も古代漢語に存在する在来語であり、Consul の訳語として転用されていた。アヘン戦争後、各国との間に不平等条約が締結

されるが、条約の本文の随所に「領事」が見られ、早くも新語として定着した。

「自主」「自立」「自治」などの在来語も欧米政治の表現に転用された。ギュツラフの『東西洋考毎月統記伝』では、英吉利国民は「自主之理」を大事にすると紹介している。[14]

自主之理者、按例任意而行也。（中略）各国操自主之理、百姓勤務本業、百計経営、上不畏、下不仇。自主理之人倜儻事務、是以此様之国大興、貿易運物甚盛、富庶豊亨、文風日旺、豈不美哉。欲守此自主之理、大開言路、任言無礙、各語其意、各著其志。国民若操自主之理、不敢禁神道、而容諸各随所見焉。由是言之、各項自主之理、大益矣。倘人縦欲、淫風日熾、天理淪亡、雖謂操自主之理、其言妄也。如是可知真理、又真理将釈爾、可為自主也。此是天下之正道、天下之定理矣

『東西洋考毎月統記伝』の「自主」は Liberty の意味で使用されたのに対し、マーティン訳『万国公法』に現れた「自主」は Independence の訳語として使用されている。

○各国称為自主之国者、原因不聴命於他国（第一巻、第一章、第九節、七オ）

○蓋自主之国、不屈己於人也、以天下之共好為権衡、（同上、第十節、十ウ）

○服化之国、所遵公法条例、分為二類、以人倫之当然、諸国之自主、揆情度理、与公義相合者、一也、諸国所商定辨明、随時改革、而共許者、二也（同上、第十一節、十二ウ―十三オ）

「自主」を「自立」や「自治」と並列させる用例もあった。

○法院所操之権、無他、乃本国自立自主之権也（第二巻、第二章、第九節、二十九ウ）

○今邦国衆多、皆自主自立、国権均平、交通往来、皆得裨益（同上、三十オ）

○論邦国自治自主之権（第一巻、第二章、タイトル）

『万国公法』には「民主」の使用例も見られる。

○美国保其諸邦、各存民主之法、且当護各邦無外暴内乱（第一巻、第二章、第二十四節、三十六オ）

○美国合邦之大法、保各邦永帰民主、無外敵侵伐、倘有内乱、而地方官有請、則当以国勢為之弭乱（第二巻、第一章、第十四節、十三オ）

○在民主之国、或係首領執掌、或係国会執掌、或係首領国会、合行執掌（第三巻、第一章、第四節、二オ）

以上のように、宣教師の造語には、新しく造った新造語も、在来語を転用した転用語も見られた。これらの近代中国語は次第に一般に親しまれるようになり、やがて日本語に移入され、近代日本語の一員になっていった。

4　造語の限界

宣教師の造語は積極的に行なわれたものの、その規模は明治日本における大がかりな造語活動とは比較にならないものであった。専門知識の欠如、翻訳の方法、方言の違い、宣教グループ間の対立などが原因となって、宣教師の造語に限界をもたらしたと考えられる。

一　専門知識の欠如

宣教師は知識人であっても、科学の専門家ではない。そのため宣教師による西洋文明の紹介は、啓蒙という点では日本の幕末維新期の知識人たちと同様な役割を果たしている。西洋の政治、法律制度など、具体的な事物については適訳が多いのに対して、抽象概念には誤訳が少なくなかった。

President の訳語はその一例である。『美理哥合省国志略』（一八三八）において、アメリカ人著者ブリッジマン（裨治文）は、自国の大統領を「首領」と訳している。「首領」という語は古典中国語では決していい意味ではない。さらに『美理哥合省国志略』の改訂版である『聯邦志略』（一八六二）において、President の訳語は「国君」となっており、君主国家の皇帝と混同されている。マーティン訳『万国公法』でも「首領」が訳語の一つとしてあてられている。

また専門的な学者でないため、宣教師は哲学、心理学など、西洋文化の真髄である学問の翻訳にも無理があり、その翻訳は専門家に委ねざるを得なかった。それに対して、こういった専門学者は明治日本で輩出しており、訳語造出に新たな花を咲かせたのである。

二　「口述筆録」の限界

一九世紀における漢訳洋書の翻訳方法は宣教師が口述、中国人協力者が筆録或いは宣教師の翻訳が終わってから中国人のネーティブチェック（潤色）の手法がとられていた。宣教師の中には中国語にかなり長けていた者もいたが、漢文という難関が立ちはだかっていた。彼らにとって、中国語は理解できても、その奥深い概念について正確に説明することはなかなか困難であった。

翻訳の中国人協力者は外国語に通じていない者がほとんどであり、西洋文化の理解には個人差が大きかった。特にそれは人文科学、社

会科学など、精神文化の面で目立つと指摘されている。[15]

しかも中国人には西洋学に対する熱意もなかった。中国人協力者は例外なく科挙という出世ルートから外れた人物たちであった。中には西洋文化に興味をもつ者もいたが、彼らにとって、宣教師の翻訳への協力はあくまでも生計を立てるためであった。当然ながら外国語を習得する熱意にも欠けていた。

こうした意思疎通の障碍は理解のずれをもたらし、理解のずれは訳語の創出を妨げる結果となった。このような環境では社会科学に関する翻訳活動は、順調には進まなかったであろう。

三　方言の差異による訳語の混乱

漢字表記の複雑性について、徐継畬は早くも一八四八年（清・道光二八）にその著『瀛環志略』において指摘している。[16]

外国地名最難辨識、十人訳之而十異、一人訳之、而前後或異、蓋外国同音者、無両字。而中国則同音者、或数十字、外国有両字合音、三字合音、而中国無此種字、故以漢字書番語、其不能吻合者、本居十之七八、而泰西人学漢字音、皆居粤東、粤東土語、本非漢文正音、展転淆訛、遂至不可辨識

このように、中国語と外国語の発音の違いによる表記のばらつき、及び西洋人が活動した地域の方言に起因する差異が指摘されている。発音の違いは容易に分るが、方言による差異の指摘は興味深い。

アヘン戦争（一八四〇―一八四二年）以前、西洋人は主にマラッカ、バタビア（現在のジャカルタ）及びシンガポールなど、東南アジアを宣教活動の中心としていた。戦争後、活動の拠点を中国の東南沿海部に移し、香港、広州、福州、厦門、寧波、上海で展開されるようになる。[17]

『瀛環志略』にある「漢文正音」とは所謂「官話」のことであり、発音は広東語とかなり異なる。徐継畬の勤務地、福州も「福建語」、つまり閩方言になる。厳密に言うと、広東語と福建語は異なる方言であるが、地理的に近いため、発音に類似点がある。例をあげると、“America”の［me］は、広東語と福建語では「米」や「弥」という漢字で表記されたほうが原語に近いが、官話では「米」は“mǐ”と発音され、［me］の発音とは遠ざかる。“America”は広東や福建では「米利堅」や「弥利堅」などの表記が通じるが、官話では通じなくなってしまう。この点から見ると、徐継畬は「漢文正音」を主張しながらも、福建語の影響は避けられなかった。

東南アジアの中国系の人は主に広東や福建から渡ったため、その言葉は香港、広州（粤方言）、福州及び厦門（閩方言）になった。アヘン戦争以前、東南アジアで刊行された書物に現れた漢字表記は、自然に香港、広州、福州、厦門に受け継がれた。これに対して、寧

波や上海は「呉方言」となるため、発音はかなり異なり、新しい漢字表記には工夫が要求される。“America”の［me］の漢字表記「米」はもはや通じなくなり、より原語に近い「美」という字が多用され、“America”は次第に「美利堅」と表記されるようになった。

四　宣教グループ間の対立

方言によって、漢字表記に混乱が生じただけでなく、宣教グループ間の対立も訳語に影響を与えている。

中国に派遣された宣教師は様々な宣教団体に所属し、それぞれの主旨に沿った宣教活動を行うが、より効率的に活動を展開するために、連携して共同の組織を作っている。一八三四年に広州で成立したThe Society for the Diffusion of Useful Knowledge in China（在華実用知識伝播会、通称益智会）はその一つである。この組織は英国のＬＭＳ（ロンドン伝道会）、オランダのＤＭＳ（オランダ伝教会）、アメリカのＡＢＣＦＭ（アメリカ公理会）所属の宣教師によって作られたのであり、当時有名な宣教師Ｊ・モリソン（John Robert Morrison 英、Ｒ・モリソンの次男）、メドハースト（英）、ギュツラフ（独）、ブリッジマン（米）などはメンバーとして活躍している。[18]

しかし、連携組織はできたとしても、各団体の宣教主旨や所属国家の違いは依然として存在していた。その相違は国家名の漢字表記にも反映されている。アメリカの表記を例として見よう。

国家としてのアメリカの最初の漢字表記は大陸名と同様に扱われ、「亜墨利加」が多かった。後に「米利堅」が主流となるが、ブリッジマンは『美理哥合省国志略』（一八三八年）において、「美理哥」を使用している。巻之二「分野度数」には次のような記述がある。[19]

夫美理哥合省之名、乃正名也、或称米利堅、亜墨理駕、花旗者、蓋米利堅与亜墨理駕者、実土音欲称船主亜美理哥之名而訛者也、（中略）至所云美理哥者、即亜美理哥也、合省者、因前各治其地、国不相聯、政無専理、後則合其省而一人為首領、故名之曰合省、是則今之合省美理哥者、固正而不訛、後云合省者、亦正而不訛也

「美理哥」のほうが、「正音」であり、「米利堅」や「亜墨理駕」は「土音」、「訛」であることを主張している。

ブリッジマンは益智会の刊行物『東西洋考毎月統記伝』の編纂者の一員とも言われている。[20] この雑誌にも「美理哥」が見られる。[21] 一八三八年「戊戌年正月」号に「華盛頓言行最略」と題した文章に「美理哥」が使用されている。[22]

○経綸済世之才、寛仁済徳遍施、忠義両全之烈士中、華盛頓独

立無比。其為美理哥兼郡之人、於雍正九年生也

○法蘭西王合美理哥民協力攻英軍

○自此以後美理哥民自主操権、掌治国也

「美理哥」をきっかけに、“America”の［me］に当たる漢字は次第に「米」「墨」に代って、「美」という字がアメリカ宣教団体の出版物に多く見られるようになった。アメリカ長老会の宣教師たちが寧波で作った印刷工場「華花聖経書房」[23]（The Chinese and American Holy Class Book Establishment）も一八六〇年に上海に移転する際、「美華書館」に名前が変更されている。[24]

一八六一年、ブリッジマンは『美理哥合省国志略』を底本に、上海で『聯邦志略』を出版する際も、タイトルに「美」を使用している。中国人梁植による「跋」には「美国」が見られる。

先生在粤数年、終日手不釈巻、無惰容、殆所謂学而不厭、誨人不倦者歟。稍暇、復恐華人不知美国聯邦之事、於是著聯邦志略一書。

一八六四年に北京で刊行されたマーティンの『万国公法』にも「美国」は多く使用され、定着を見せていた。

○是書原本出美国恵頓氏選繕（凡例）

○是書之訳漢文也、本系美国教師丁韙良（凡例）

○美国絶英自立之時、法国認之幷暗助之（第一巻、第二章第十節）

○美国彊内之紅苗、恃美国保護、而可謂半主者也（第一巻、第二章第十四節）

しかし、「花旗」や「合衆国」などの意訳が多く使用されていた当時、「美」という漢字はすべての宣教団体には受け入れられなかったようである。イギリス人ミュアヘッド著『地理全志』（一八五三―五四）には、「美」は見られず、「米利堅」が使用されている。[25]同じくイギリス人ワイリー主編の『六合叢談』（一八五七―五八）にも南北アメリカ大陸を指す表記は「亜墨利加」、新興国家アメリカを指す表記は「米利堅」しか見られない。[26]

アメリカ以外の宣教団体、特にイギリス人は新興国家アメリカに対して、「美」という表記に抵抗があったかもしれないと考えられる。また、訳語の調整・統一を議題とする会議が何回も行われていたことから見ても、宣教師グループ間の対立があったと察しえよう。

5　おわりに

以上のように、本論では一九世紀中頃までの漢訳洋書を対象に、

社会科学関係の新漢語を中心として西洋人宣教師の造語状況について考察した。宣教師によって新しく造られた漢語に、音訳語「巴力門」、直訳語「上院」「下院」、そして「国会」のように、短文を省略して成立した短縮表現が見られる。新造語に対し、「選挙」「領事」「自主」「自立」「自治」等のように、中国古典にある在来語を利用した転用語も見られる。宣教師の造語活動の限界について、いくつかの原因が考えられる。宣教師たちの専門知識の欠如や「口述筆録」といった翻訳方法は中国人助手との意思疎通に障害を与え、的確な訳語の造出が困難なものとなったといえよう。方言の差異によって訳書における人名や地名の翻訳に混乱が見られ、そして宣教グループ間の対立も訳語の不統一の大きな原因だと考えられる。今後、この時期における西洋人宣教師と中国人助手の協力の具体像の解明に努めたい。

注

(1) 飛田良文(一九八六)「西洋文化の移入と新漢語」、『月刊国語教育』九月号、一一一頁。

(2) 前期と後期漢訳洋書の呼称について、学者によって様々に見られる。飛田良文(一九八六)一一三頁、佐藤亨(一九八六)『幕末・明治初期語彙の研究』桜楓社、一七―一九頁、荒川清秀(一九九七)『近代日中学術用語の形成と伝播　地理学用語を中心に』二三―二六頁、陳力衛(二〇〇一)『和製漢語の形成とその展開』汲古書院、二六七―二七五頁、沈国威・内田慶市(二〇〇二)『近代啓蒙の足跡―東西文化交流と言語接触:『智環啓蒙塾課初歩』の研究』三七―六一頁を参照。

(3) 熊月之(一九九四)『西学東漸与晩清社会』、上海人民出版社、一〇四頁。

(4) 同上、八―九頁。

(5) 同上、二一四頁。

(6) 『天道遡原』に関する詳しい研究は吉田寅『中国プロテスタント伝道史研究』、汲古書院、一九九七年(一七四―二一二頁)を参照されたい。近代宗教用語の形成に貢献が大きいと示唆されている。

(7) 張嘉寧「『万国公法』成立事情と翻訳問題―その中国語訳と和訳をめぐって―」、加藤周一・丸山真男校注『日本近代思想大系〔一五〕翻訳の思想』、岩波書店、一九九一年、三八六頁を参照。なお、張論文は Ralph R.Covell, *The Life of and Thought of W. A. P. Martin : Agent and Interpreter of Sino-American Contact in the Nineteenth and Early Twentieth Century* (1974, University of Denver に提出した博士論文。Xerox University Microfilms, Ann Arbor, Michigan) を引用している。

(8) マーティン(丁韙良)訳『万国公法』「凡例」を参照。なお、「江寧」「通州」「大興」「定海」は地名である。地名から見ると、「江寧」と「定海」は寧波に近く、「通州」と「大興」は北京の郊外にあたるので、翻訳活動の行われる舞台は中国の南から首都北

京に移動したことが窺える。ここにも、マーティンの清政府に急接近する苦心が見られる。協力者の四人はいずれも歴史上、他で名の知られていない人物であり、マーティンに仕えていた文人とも考えられる。当時、科挙試験に失敗し、いわゆる仕途（官途）に落胆した文人で、西洋人宣教師に雇われ、その翻訳事業に協力する者がいた。その中で、王韜（一八二八―一八九七）のように、後に中国文化と近代西洋文化の橋渡し役として、有名になった人もいる。しかし、人数として決して多くなかった。なお、王韜に関する研究は Paul A. Cohen, *Between Traditional and Modernity : Wang T'ao and Reform in Late Ch'ing China* (Cambridge : Harvard University Press, 1974) を参照。中国語は雷頤・羅検秋訳『在伝統与現代性之間―王韜与晩清革命』、江蘇人民出版社、一九九八年を参照。

(9) マーティン訳『万国公法』冒頭、董恂による「原序」を参照。

(10) 同上、三一八頁。

(11) 高原泉「清国版『万国公法』の刊行と日本への伝播―日本における国際認識転換の前提として―」、『中央大学大学院研究年報法学研究科篇』二九号、一九九九年、二八四頁。

(12) 荒川清秀（一九九九）「近代日中学術用語の研究をめぐって」『中国21』Vol. 6, 二四一頁。

(13) 飛田良文（一九九二）『東京語成立史の研究』東京堂出版。

(14) Gützlaff 等編、黄時鑑整理（一九九七）『東西洋考毎月統記伝』（復刻版）、中華書局、四二―四四頁。

(15) 熊月之（一九九四）、一七頁、二六六頁。

(16) 徐継畬『瀛環志略』「凡例」、六丁表、対媚閣蔵版、国際基督教大学図書館所蔵。原文大意：外国地名は最も分かりにくく、十人の翻訳は十通りになる。同じ訳者でも、前後で異なった訳語を使用することがある。外国語は同音でも文字は違うが、中国語は同じ発音に数十の漢字をもつものがある。外国語には二字や三字で一つの発音をなすものがあるが、中国語にはこのような文字はない。そのため、漢字で外国語を表す場合、一致できないものは本来七、八割を示す。しかも中国語を習得した西洋人のほとんどが広東の東部に居住している。広東東部の方言は標準語ではなく、様々な訛が混入したため、識別できなくなったのである。

(17) 飛田良文・宮田和子（一九九七）「十九世紀英華・華英辞典目録翻訳語研究の資料として」参照、『国語論究6 近代語の研究』明治書院。

(18) 益智会のような団体間の組織はアヘン戦争後にも設立され、主に教科書や新聞雑誌の刊行に貢献している。

(19) 中国社会科学院近代史研究所、近代史資料編輯部編『近代史資料』総九二号、一九九七年、三五頁。

(20) 蔡武「談談『東西洋考毎月統記伝』」、台湾『国立中央図書館館刊』第二巻、第四期、一九六九年による。なお、黄時鑑はこの見方に疑問をなげかけている。Gützlaff 等編、黄時鑑整理前掲書、一〇頁参照。

(21) 「美理哥」の他に、「亜墨利加」「亜墨理駕」「米利堅」「阿米利加」「亜米利加兼合国」などが見られる。

(22) 上記『東西洋考毎月統記伝』、三一九―三二〇頁参照。

(23) 華は中国、花は「花旗」の略、アメリカを指す。

(24) 美はアメリカ、華は中国を指す。日本で初めての和英辞書であるJ・C・ヘボンの『和英語林集成』の初版（一八六七年・慶応三）、二版（一八七二年・明治五）はこの美華書館で印刷されている。

(25) 内閣文庫所蔵『地理全志』参照。

(26) 沈国威編著『『六合叢談』の学際的研究』「語彙索引」を参照、白帝社、一九九八年。